
世界は金の檻

来海 由佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は金の檻

【Nコード】

N8285T

【作者名】

来海 由佑

【あらすじ】

魔族と人間のハーフでありながら、魔物を打ち滅ぼす破魔士として旅をする青年カイリと、少年の姿をした魔族でありながら人を厭わない、極度のめんどくさがり屋のシユウ。

二人が出会い、旅をするその先で何を見つけるのか。

第一話 魔族と破魔士（前書き）

以前に別ジャンルで書いたものをリサイクルです。
時間つぶしにでも楽しんでいただけると嬉しいです。

第一話 魔族と破魔士

「くっそー…カンが鈍ったかなあ…」

喉の奥で唸るように呟いた声が不気味な森に消えていった。

溜息をついて天をあおぐとそこにあるのは、生い茂った木々。空すら見えはしない。最も見えたとこで、どんよりと曇った夜の空だ。

先ほどまでズクンズクンと響いていた熱い痛みは今、凍えるような冷たさを残して感覚がなくなった。

——やべえな。

ぞくりと全身に走った悪寒に唇を噛む。

辺りは真っ暗になってきている。どうにかして、火を起こすくらいしとかなないと、狙ってる獲物どころか、普通の獣の餌食だ。

ちらつと足に視線を向けて、獲物の反撃で斬りつけられた傷を見る。

右の袋はぎから、足首にかけての数十センチ。

「……う、…えぐ」

自分の足に向かって言うのも何だが、青黒くぶつくりと腫れあがった傷口とその回りをこれまた黒っぽく濁らせる血の痕はあまりにグロテスクだ。

「くそ……ここんとこ本職なかったもんなあ……」

ぽつりと呟く、彼の名をカイリィクラウという。

年齢26歳、職業、破魔士。

破魔士というのは、人間に害する魔族を狩る異能者のことだ。

この世は大きく分けて三つの世界がある。

一つは天使と呼ばれる有翼の人種が住まう天界。白い羽毛の羽根はその天使の特殊な能力の強さに応じ、大きさが違う。より強い力

を持つ者は大きく美しい羽根を持つ。

もう一つが魔族と呼ばれる同じく有翼の人種が住まう魔界。黒い蝙蝠のような翼を持つ魔族も同様に特殊な能力を持ち、その強さに応じて大きさが違う。

この二つの種族の大きく違う点は、そのエネルギー源である。

天使は善なる心や、清浄なものの象徴たる神気を。

魔族は悪なる心や、不浄なるものの象徴たる邪気を。

それぞれ正反対の物をエネルギーとする。

そして第三の世界、地界に住むのが人間である。

人間は翼を持たず、特殊な能力もない。天使や魔族よりも劣った種であるという認識はどの種族も持っている。人間ですら、そう認識しているのだ。

天使は神の使いとして敬い、魔族は邪の象徴として恐れる。それが当然だ。

天使は時折地に下りては、人々を聖へ導き、魔族は時折地に上っては人々の負の感情を得る為に人々を惑わす。

その魔族を狩る破魔士はとも数が少ない。だからあっちこっちと引つ張りだこなのかと言うと、そうでもない。

魔族は人間よりも企みに長けている。魔族だと気付かれることなく、人々を弄び、負の気である邪気を得、ついでに人の命を弄び消える。魔族が現われて、破魔士に退治を依頼する間もなく、コトが終わっているのがほとんどだ。

そのせいで、いつも本業である破魔士の仕事は少なく、普段は傭兵として世界を渡り歩く。彼、カイリもそういう一人であった。

ただし、今回の仕事に限り、本業の方だったのだが。

「……………せめて村に戻らねえと… つぐう！」

無理にでも立ちあがろうとした瞬間、激痛が走る。

「……………ちつくしよ……………こんなトコで犬死にかよ…っ」

唇を噛む。

この傷のせいで身動きができない。

魔獣にやられた傷のせいで。

通りすがりに寄った村で受けた久々の本業は、山に現れる魔獣を倒してほしいということだった。

魔獣とは、魔族によって邪氣を与えられ凶暴化した、いわゆる眷属のことを言う。その魔獣がいるせいで、近辺の村に被害者が出ていた。快く引き受けて、装備を整え、山に入ったのだが……。

「三匹もいるなんて聞いてねえぞ、おい……」

遭遇した魔獣は二匹だった。苦戦したがなんとか倒して、油断をした瞬間、背後から飛び出してきたもう一匹。

かろうじて生きていただけでも自分を誉めてやりたい。

とはいえ……。

「この状況じゃなあ……」

魔獣あるところに魔族あり。

自分の気はただでさえも目立つのだ。こんなところで無防備に転がってて、魔族に見つかろうものなら……。

そんなコトを考えた瞬間だった。

近づく邪氣を感じたのは。

「……っ！」

その邪氣の濃度。

とても人間には持ち得ないその独特の気配に緊張が走り、側にあった剣を引き寄せる。

邪氣と反対属性の神氣によって破魔刀に鍛えられた愛剣の柄を片手で握りながら、もう片方は同じく神氣で清められた銃を手にする。近づいてくる邪氣。その強さに肌に鳥肌が立つ。

こんな銃ごときじゃきかない。破魔刀ならなんとか……。しかし動けない。

じんわりと浮かぶ冷や汗。

——ここで死ぬのか？

こんなところで？

カサリ、と木々をかきわけける音がした。

その足音は思った以上に軽い。

近づく音。そして。

ガサツ！！と少し離れた先の草むらを掻き分けてその魔族が現われた。

「え……？」

咄嗟にそんな声が零れる。

「……………妙なのがいると思ったら」

その声は少し甲高い、子供の声だった。身長もカイリのふとももくらいだろうか。

大きな薄金の瞳、それより少しだけ濃い金色の髪。感情を思わせない口調。カイリが想像した魔族像よりもずいぶんとかけ離れた可愛い姿の少年がそこにいた。

呆然と見るカイリの前で、その少年はもの珍しそうにまじまじとカイリを見て。

「……………混ざりモノ？」

「……っ！」

その声にどきつと心臓が跳ねた。頭から冷水をかけられたような感覚。

手にした銃の撃鉄を起こす。

「……そんなの効かないよ。そっちの破魔刀使えば……ああ、怪我してるのか」

淡々と事実だけを述べる口調。相手の考えがわからない。わかるのはその邪気の濃さ、強さ。姿は子供でも、その能力は強い魔族。それに、魔族は姿なんていかようにでも変えられる。人間より遥か長い年月を生きる生き物なのだから。

「それより、質問してるんだけど？混ざりモノかって」
混ざりモノ。

その言葉をどれだけの相対した魔族に言われただろうか。侮蔑の声で。

「……… だったら、なんだってんだ」

喉の奥で唸るように答える。できるだけ反抗したような声で答えたにも関わらず、少年の様子に変化はない。

「父親と母親、どっち？」

関係ないだろと言おうかと一瞬迷う。それでも何故か素直に答えていた。

「……… 親父」

「ふうん」

そんな心の葛藤を知ってか知らずか無感動に呟いて、まじまじと見物される。その視線が居心地悪い。

「こんなところで何をしてるの？」

「……… 何って。魔族が、お前が作った魔獣を……」

「魔獣？」

「あ？」

てつきりこの魔族によって作られた魔獣だったと思つての発言に、訝しげな声が返された。

「魔獣なんかいるの？ココ。……ああ、そりやそうだね」

深々と溜息なんかつきやがるその少年。

「お前の、じゃないのか？」

「違うよ。そんなめんどくさいことしない。何、全部倒したの？」

「いや、一匹取り逃がした」

「倒しに行かないの？……ってそっか。その足か」

「あ、ああ」

「それ治療したら倒しに行く？」

「そりやあ、行くけど……」

「じゃあ、治してあげる」

無造作にそう言つて、すたすたと近づいてくる少年の姿に思わず焦る。

「お、おいっ！」

「いいからじつとして。……派手にやったね」

銃の照準は当てたままなのには全く頓着せずに傷口の側にしゃがみこむ。そして、背負っていた小さなリュックを側に下ろした。

敵意も殺意も全く感じない様子に、いきなり斬りつけることもできず、困惑する。

「お前一体何なんだ？」

思わず零れた問いに一瞬だけ視線を上げる。

「シュウ」

「あ？」

「名前」

「……いや名前とかじゃなくて」

どこまでもマイペースに問答無用に会話を断ちきつて。

すくつと急に立ちあがるシュウとやらの面食らつて、ただ呆然と見上げる。

「暗すぎる。治療できない。お湯もいるし。野営準備するから。そ

のまま転がって」

「……………あ、ああ」

そのまま俺には目もくれずに、枯れ木を集めてきては焚き火の用意をし、術を使って火を灯す。そうして準備を整えていく姿はあまりに手馴れていて、なんだか現実味がなかった。

「あ、そうだ」

半分麻痺したような頭で、ふと気付いて呟くと、一応俺の方を見て、目でなんだと問いかける。

それに困ったような戸惑ったような複雑な表情で見返して。

「俺は、カイリィクラウドだ」

「ふうん」

また無感動な呟き。

それが変わり者の魔族、シュウとの出会いだった。

第一話 魔族と破魔士（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第二話 親切な悪夢

目が覚めると、昨夜のことが嘘のようによい天気だった。まるで昨日のことが悪い夢だった様に。

だが夢でない証拠が。

目の前をぼてぼて歩いている。

パチパチと木がはぜる音。

その最中でその作業は始まった。

シユウのリュックからは、出て来たのは驚いたことに銀色の医療器具だった。そしてそれを煮沸消毒して治療を開始する。

傷口に入った小枝などの除去、その傷口の消毒。そしてなんだかよくわからない粉。

「なんだよ、それ」

「コレを極少量の水に解かして、ジェル状にするの。それを傷の上に約5ミリ程度の厚みで塗ると、傷から移った邪気と、傷から来る熱を吸い上げ、細胞の状態をよりよく戻し、それと同時に進行で術の応用で内部の死滅してる細胞を……」

「つらつらと話しながら顔をあげて、初めてみる秘境の食い物を食べたとような顔をしているカイリを見て、数秒沈黙した。」

「……………腫れを冷やす薬」

「あ、ああ」

「ようやく口の中の物を飲みこめたような顔をする。妙なものを使わ

れるのはごめんだと思つての質問だったのだが、妙なものだとしてもわかりようがないらしい。

溜息が零れる。

その時のカイリにできるのは、されるがままになることだけだった。

シュウの治療の結果はたった一晚で劇的なものだった。

「……しっかしすげえもんだな」

怪我してるほうの足で、たんたんつと軽く片足跳びしてみるが、痛みはない。流石に傷はまだ残っているが。

例の粉を解かしたぶよぶよの物体は朝になって真っ黒になってい
たから、違うものに取り替え、今も貼っている。だが腫れはずいぶ
ん引いていた。最初は水色だったものが真っ黒になっていたのを見
て焦ったが、シュウは平然と『穢れを吸い上げただけ』と言ってい
た。やはりよくわからない。

「お前一体何者だよ」

「だから、シュウだって」

「いや、だから名前じゃなくて……」

常時この様子で会話もなかなか成立しない。

ただわかるのは、この少年の姿をした魔族が行ったのは真っ当な
医者ができるような治療じゃないということ。

この魔族はこの山に何かを探しにきているということ。

そして、魔獣が邪魔だと感じ、倒させようとしていること。

「なあ」

「……………」

「お前、あの魔獣を作った魔族を知ってるのか？」

「……魔族は知らないけど、あの魔獣が産まれた原因はわかる」

「なんだよ、それ」

意味深な表現。それが引つかかって問いかけると、シュウが沈黙した。

「俺を利用する気なんだろ。足、治してもらったし、ヤツを倒すのはやるが、わけもわからずじゃ、気分わりいんだよ」

沈黙したまま歩き続けていた背中を見ながら言い、立ち止まる。そうするとその気配に、しかたなさそうにシュウが立ち止まった。

くるりとコチラを振り返る時に、薄金の髪が陽の光を受けて、きらきらする。それを少し眩しげに見て。

シュウは軽く溜息をつく。

「……………魔獣がどういう生き物だか知ってる？」

「どういつって…………？」

「知ってる限り、あげてみて？」

ぶっきらぼうにそう言うシュウ。だが、説明し様としてくれていることは通じるから、大人しく口を開いた。

「魔族が作るんだろ。ええと、通常の獣よりも邪気が多くて、凶暴性が増してて、個体によっては簡単な術やら知能やらを持つてる、だっけか」

「そう。どうやって作るかは？」

「知らねえけど、邪気を注ぎこむんじゃないのか？」

「そんな面倒なことはいらない。注ぎこまなくても、邪気を受けてるだけで、魔獣化するから。つまり、魔界の植物とかの側にいても魔獣になるんだ」

シュウの言葉に寒気が走ったのは、たぶん嫌な可能性に気付いたからだ。

「で、今回の場合は、その魔界の植物だったのか？」

「そういうこと。俺が用があるのがその魔界の植物の果実。何らかの原因で種子が地界に流れ付いたんだろうね」

「……………なあ、つまり今の話からすると」

「ん？」

「……………残りの魔獣一体とは限らないってコト、か？」

背筋を伝う冷や汗。

それを知ってか知らずか、シュウは無表情で答えた。

「そうだよ」

「ええと……倒すの手伝う、よな？」

「それは貴方の仕事」

「ちよつと待てって！おいっ！二匹でも大変だったんだぞ」

「その為に治したんだから」

——だからかつ！！

内心でそんな言葉がよぎる。

何か裏があると思ったんだ。ああ、思ってたともさ。

ここまで嫌な裏だとは思ってなかったけどなっ！

「お前、そんなナリでも魔族だろ！俺より邪気とか強いじゃねーか。出し惜しみしないで手伝えよっ！」

「出し惜しみとかそういうことじゃない」

「じゃあ、なんだよっ」

なんとかその気にさせようとくいさがるカイリの目の前で、シュウはきっぱりはつきり言いきった。

「めんどくさいから嫌なだけ」

「……………」

あまりにも強くきっぱりと、これはきつとなんの裏もなく本心なんだろうなあと思わせる口調で宣うシュウを目の前に嫌な沈黙が落ちる。

その沈黙を破ったのは近付く邪気の気配と、さらりと告げたシュウの一言。

「仕事だよ」

「ちつくしよーっ！」

第三話 前哨戦（前書き）

戦闘描写って難しい…。

第三話 前哨戦

第三話 前哨戦

戦闘直前で世界はコマ送りに変わった。
体内のモードは戦闘用に切り替わる。

現われた魔獣は全部で三体。

戦闘は、宣言通りに控えて一切動かないシュウを背後に始まった。
ただ一言に魔獣と言っても色々な種類がいる。邪気を受けた動物の種類によってタイプも違うという。

三体の内、二体は野犬、一体は狐が魔獣化したものらしい。元が野犬だ狐だと侮ると酷い目にあう。大抵魔獣化を起こすと、サイズそのものが巨大化する。この三体もそれぞれ虎くらいのサイズになっていた。そして、魔獣化しているという一番の証拠はその紅く染まった瞳。

三体同時につつこんで来られたら厄介だ。

まず銃使って、先頭の一体の両側二体に動きを押さえるべく射撃。

グガアアアッ!!

響き渡る咆哮、威嚇射撃で撃った弾が右側の野犬タイプの肢を撃ち抜く。と、同時に引き抜いた破魔刀でまっすぐ突っ込んで来た先頭の一体の牙をガチンッ!と受け止める。

「……んにゃろっ!」

組み合い、動きを止めた一瞬に右足で腹部に蹴りを叩きこむ。

「ッギヤンッ!!」

その一体をはじき飛ばしておいて、威嚇射撃でも無事だった狐タイプの魔獣が飛び込んで来るのに対し身構える。右足を後ろに引いて、ぎりぎりまで腰を落とす。狙いはその魔中が飛び掛ろうと大き

く身体を伸ばした瞬間。

——今っ！

大きく踏みこむ。

伸ばしてくる爪の下をかいぐぐって、腹部の辺りに滑りこみ。

一閃！

重い手応え。

刃の深いところに響いた衝撃。

背後で響いた咆哮。

やばい。

致命傷じゃない。

でも振り返る余裕はない。

威嚇射撃で肢を撃ち抜いている魔獣に向かう。

今度はしくじらない。

とびかかろうとするその一瞬前に剣を振りかざす。

狙いは心臓。

躊躇いなく突き刺して。

あたりをつんざくような断末魔。

びくびく痙攣する体躯を蹴るようにして剣を引き抜く。

振り返らないまま、前方に片手をつくようにして、跳びながら反転。

さっきまで立っていた場所に腹部を蹴ってはじき飛ばしておいた魔獣が爪を振り下ろすのをしっかりと見ながら銃を引き抜く。

狙いは眉間。

外さないで、正確に。

ガウンツッ！

たった一発の銃声で、倒して。

最後の獲物を目で探して、見つけた瞬間飛び出していた。頭の中が真っ白になっていたんだと思う。幼い十かそこの無防備な子供に飛びかかるうとする魔獣を見て。

間に滑り込んで牙を剣で受け止める。

ぎりぎりとせめぎあう後ろで驚いたような、呆れたような声があった。

「何、してるの………？」

——何って。

心の中のなんだか妙に冷静な部分で呟きを返した瞬間思い出す。

——あ、こいつ魔族だった！

うわ、バカだ俺！こんなことしなくてもこいつは全然。

「仕方ないなア………」

全然、平気。

意味のないコト。

の筈、だったんだけど。

——え？

呟くような声が、何かの痛みを堪えてる声だと思った。

痛みを堪えて、それでもどこかで嬉しく思ってる、ような。

背後でシュウが何かの術を唱える気配がした、瞬間、魔獣が跳び退き、地面をのたうち始めた。

「……とどめ」

端的にそう促す声に従わない理由などなく。

暴れて跳ねあがる前肢を受け流し、心臓に剣をつきたてる。

びくんびくんっと全身を痙攣させて、息絶える魔獣。

それを用心深く確認。

安全を確かめて、ふうつと深く息をつく。

そして、背後のシュウを振り返った。

シュウは逢った直後みたいな無表情のままだった。

「ご苦労様」

「……………おう」

さっきの声の理由を聞いてみたけど、そんな親しいみたいな繋がりもないから何も言わない。シュウも何事もなかったみたいに言って、歩き出す。

自分の横を通りすぎていく小さな頭を見下ろして、目で追いながら振り返ると、なんにもかまわずに歩いて行く後ろ姿があった。

「お、おい……………」

どこに行くんだって聞きかけて、そうだこいつは邪気放つ植物を目指してるんだと思いなおした瞬間、とてつもなく嫌なことをシュウが言った。

「でも終わりじゃないよ」

「ああん？」

「樹の邪気あるけど、それ以外でも動いてるのがいる。魔獣はまだ残ってる」

「げえっ！！まじかよ」

心底、こんな仕事受けるんじゃないかと思った。

第四話 邪樹の下で

第四話 邪樹の下で

肌がびりびり震えるような邪気だった。

「……………コレかよ。お前の言ってた魔界の植物って」
鳥肌が止まらない。ごくんと生唾を飲み込む。

目の前にあるのは一つの巨木だった。ほとんど黒に近いこげ茶色の樹皮と、ものすごくくすんだモスグリーンを更に濁したような色の葉と、透きとおりうつすらと青く輝く果実。

あまりにもアンバランスな美。

樹や葉があらゆる穢れを吸収して、綺麗な純粋なものだけ結晶化させたみたいな実だった。

「それ。触ったらダメだよ。人間だし、耐性ありそうだから魔獣化まではしないだろうけど、かなり物騒だから」

淡々と言ったシュウを驚いて見下ろす。

「そんなやばいのか？……………あ、もしかして魔獣発生の原因って……………」
「そういうこと」

果実の真下に立って、指先で何かの印を切ると、その果実の包む透明の膜が発生し、その印を縦に真ん中から切るような指の動きをすると、膜ごと果実が消え去った。

「……………何したんだ？」

「術で作った空間に送っただけ」

「ふうん……………」

さらりと答えるシュウに何気に答えながらも、樹から視線を逸らせない。

「で、これどうするの?」

「あん?」

ふいに問いかけてきたシュウの言葉が、なんだか遠いところから聞こえるような感じで。

と思った瞬間、思いきり向うずねを蹴られた。

「……っぐっ!……て、めえっ!何しやがるっ!」

弁慶の泣き所にクリーンヒットした蹴りのせいで目に涙が浮かぶ。胸倉を掴んで詰め寄らなかったのは、相手が子供の姿をしていたから……ではなく、めっちゃめっちゃ嫌そうな顔でシュウがこちらを見ていたからだった。

「何、邪気に飲まれそうになってるの?」

「……あ」

その一言で頭が覚めた。樹の邪気に当てられかけていた自分に気付く。シュウはそれから覚ましてくれた、らしいのだが。

「もう少し穏便な方法はねえのかよ」

「あるけどめんどくさい」

「……」

シュウはどうやら極度のめんどくさがりやらしい。

「どうでもいいけどコレどうするの?消そうか?」

あっさりというシュウに少なからず驚きを覚える。

「いいのか?」

「いい、って何が?」

「いや、お前の話からして、コレが結構貴重なもんだってのは想像ついてたから、これ消すの嫌がられるかと思ってたんだが」

目をぱちくりしてシュウを見る。

「下手すりゃ、戦闘かなっても……思っ」

いた筈なんだが。全く殺気を感じないせいで、そのことすらすっかり忘れていた自分に更に驚く。

「にしては、無防備すぎない?」

「いや、それは……そうだよなあ……?」

「何それ」

—— あ、呆れてる。

そうだよなあ、呆れるよなあと心の中で呟きながらも、なんとか弁解をしようとする。

「……………だってお前、殺気ないし。それになんつつつか……………」

まじまじと見下ろす。

感じる奇妙な親しみの理由は。

「……………そう、なんつつつか、同類みたいな感じがする」

その言葉にシュウがちよつと驚いたような顔をする。

「……………んだよ」

今度は向こうが目を大きく見開いて、不思議な色合いの薄金色の瞳で見詰めるから、ふてくされて呟く。それにシュウが答えたのは、大変無礼な一言で。

「……………変人」

「…ああん？」

咄嗟に怒りを込めた声をあげるが、そのシュウが本当に驚いた様に見えるから、それ以上の言葉が出ない。

「まあいいや。とりあえず、樹燃やすから下がって」

「……………お、おう」

今までの会話を忘れたみたいに無表情に戻るシュウに戸惑い気味に返事を返し数歩下がる。

「ついでに集まってきちゃった残りの魔獣よろしく」

「おう……………つてなにいつ!？」

緊張感に欠けた口調で言葉を続けたシュウに頷きを返し、数秒して言葉の意味を察して振り返る。

そうしてカイリの視界に飛び込んできたのは木々の間で赤く光る瞳。

「……………勘弁してくれ」

喉の奥で唸るような声で、うんざりと呟く。

魔獣は他と変わらず、いくぶん巨大化した鴉だった。その数、二匹。

明らかに自分たちを狙っているのを見て、カイリは諦めの吐息をついた。

第五話 神気

第五話 神気

シュウはその樹の目の前に立ち尽くして、意識の集中を始めた。
この樹を燃やす術を使う為だ。
邪気のかたまりである樹を燃やすのに、魔族であるシュウの得意とする邪気の術では意味をなさない。それではない特別な術を使わなければならぬから、シュウは幼さの残る声で呪を唱え始めた。

「果ての世にありし、紅蓮の劫火よ」

呪は力の道標。

力を導くもの。

イメージするのは白いけがれなき炎。

邪気を焼き尽くす。

邪気を使った普通の術なら呪など使わない。

難しい術を使う時に使われる。

シュウの場合は特に。

「この内なる半身の声に応え、疾く来たれ」

白き炎のイメージは樹の根元に。

邪気を払う力を持つ唯一の力、神気を源に。

天敵である天使が持つ、魔族であるシュウとは正反対の属性の。

白く清らかなる、力。

「歪みし邪樹を焼き尽くせ」

呟くようなその言葉が術の発現を促す。

辺りに白い閃光が走る。

その白い閃光の中、樹の根元に純粋な神気の炎が燃えあがる。

心のどこかで、背後の彼、カイリ＝クラウドが驚くだろうなと呟いて。

正面に相対する敵が行動に移ってくるのを緊張して見詰めていた時、背後で不思議な気配がした。

カイリの常識から考えて有り得ない気配。

——神気っ！？

咄嗟に思ったのは、神気異能者の同業者か、天使が邪気排除に現われたのかということ。

だが、振り返ったそこには先ほどと変わらず、魔族であるシュウがいるのみ。

魔獣のことを意識せずに振り向いてしまったカイリだったが、そのスキを狙われることはなかった。

気配を察して振り返った数秒後、白い光の爆発が起きる。

閃光。

それがまたたいて。

魔獣がその光を受けて、悲鳴のような咆哮を上げる。それが正気に返らせてくれた。

今、自分がなすべきことは。この魔獣達を倒すこと。

カイリは素早く自らの銃に手を伸ばす。

カイリの使う銃は、さほど威力は大きくない。使う人間にも向き不向きがあるせいだ。カイリは能力的に剣の方があっている為、剣の性能の方を重視する。その為、ただでさえも高価な清めた武器では、それしか手にいれることが出来なかったのだ。

その銃は、強い魔族には深手を追わせるのが難しい。

だが、羽根を持つ魔獣や羽根を出した魔族。それらをこの地面に引き摺り降ろすという目的の時、それは最大限の効果を発揮する。

樹の根元に燃えあがった神気の炎のおかげで、敵は浮き足立っている。その隙を見逃す手はなかった。

無作為に空を舞っていた魔獣の内の片方。

狙うのは羽根の付け根。

狙いを定めて。

――撃つ。

「ッよしっ!!」

弾は狙い通りの箇所を撃ち抜く

奇声をあげて墜落してくる魔獣を見て、2匹同時に落とすより、確実に一匹ずつ仕留めることを選ぶ。

銃をひとまず腰のホルスターへ戻し、代わりに剣を引き抜いて。

地面を蹴って接近する。

羽根の片方を打ち抜いたとはいえ、もう片方の羽根も鋭い爪も無事。油断は禁物。

地面でばたばたとがむしゃらに暴れる魔獣を仕留める。

ラスト一匹。

さつきと方法は同じ。

剣を左手で逆手に持ちなおし、右手で銃を引き抜こうと腰に伸ばしながら。

見据える。

—— あ、やばい。仲間殺られて、気、たってる。

今度は無作為に飛んでるだけじゃない。明らかにこちらを狙って。

急降下。

銃じゃ駄目だと思った瞬間、逆手に持ったままの剣を目の前に持ってくる。

ギンっ！！

鋭い金属音が鼓膜を震わす。

かろうじて受け止めた剣。

衝撃の強さにもう片方の手も添えて。

すぐ目の前にある魔獣の目とぼつちり視線が重なった時、自分がシユウに言った言葉が頭をよぎった。

『個体によっては簡単な術やら知能やらを持つてる』

中でも、知能が比較的高い動物が魔獣化すると特に起きる現象だ。鳥類ではもつとも鴉がそういう変異を起こしやすい。

知ってたのに、その瞬間忘れてて。

思い出した理由は、ソレが嘴を大きく開いて、そこに紅い火が灯るのが見えたから。

「っっ！！」

本能的な危機感。

乱暴に左腕の剣を振って、振り払う。

少しその勢いに負けて離れた魔獣、宙にホバリングして、大人の拳大に大きくなった炎の塊を放つ。

ムリヤリに軀を低くして、右側に斜めに傾けて、その下をくぐり抜ける。

——ダメだっ！

よけきれない。

右腕に衝撃。

熱さは感じない。

でも、足は止めない。

二撃目は打たせない。

何も考えずに振るった左腕。

その先の剣が正確に魔獣を捉えて。

耳をつんざく断末魔。

それが最後の記憶で。

——意識が闇に落ちる。

そして、懐かしい夢を見る。

『母さんは後悔してないの？』

いつだったろう？そう母親に問い掛けたのは。

芯の強さをあらわすようなストレートの黒髪の母。彼女はその問いに柔らかに微笑んで。

『していないわ。だって愛してるもの』

『逢いに来てもくれないのに？』

魔族の男を愛した人間の女。

『逢いに来ないのは、私達に魔族の気に移したくないだけ。いつだって見守ってくれていると知っているもの』

『いつだって？』

『ええ。今この瞬間も』

『逢えなくても寂しくない？』

首を傾げて見上げる。

『寂しくないわ』

『どうして？』

『わかるもの。彼が私を愛していることを』

『魔族なのに？』

魔のイキモノ。

魔族。

愛を知らぬイキモノ。

そう言った村の司祭。

『魔族だって人を愛するのよ』

くすつと微笑んと言った母。

その、幸せそうな笑顔。

第六話 戦い終えて

第六話 戦い終えて

目が覚めると朝だった。

……… たぶん、朝、だと思う。

——— よくわからないけど。

空気が朝独特の澄んだものだし、目の前の小枝で作った焚き火の火はくすぶって白い煙をわずかにあげている。

シウはちょうど正面にある樹に背を預けて、何かの布を自分の身体にまきつけて寝てるし。

「ただの子供にしか見えねえ………」

目を覚まして正面にあるその光景を見て、まず最初にそう思う。朝ではないかと認識したのは、その後。

「ええと………」

何がどうなっているのかわからない。

記憶がすっぱり抜け落ちていて。

視線をめぐらすと右側、少し離れた先に焼け焦げた大木の根っこだけ残っていて、それが魔界の植物だと知る。神気の炎に焼かれたヤツだ。

炎。

そう！それだ！

ようやく自分が魔獣の放った炎球を受けて意識を失ったことを思いだし、自分にかけてあった布を払いのけて右腕を見やる。

ぐるぐる巻きにされた包帯を上から軽く触つてみると、ぶよぶよと表現するのが最も適してるような妙な感触。

「なっ!?!」

痛みはない。だがその妙な感触に焦って声を上げると、正面から冷静な声が零れた。

「昨日、足にしたのと同じジェル状のが包帯の下に張ってあるだけ」

ハツと息を飲んで顔をあげると、さつきと同じ姿勢のまま、冷静な視線を向けてくるシュウの姿があった。

「皮膚が大分やられてたから、暫く入浴禁止。水浴びするときそこは濡れないようにすること。化膿止めの薬は1日2回。ただし空腹時は絶対飲んじゃ駄目。結構強い薬だから」

言いながら立ち上がり、自分の軀に巻きつけていた布をパンツと振った。

それでようやく全体が見えて、シュウの外套だとわかる。マントにもコートなるそれは旅の必需品。真夏こそ、暑いだけだが、春秋冬大抵、必要になる。よく見れば自分に被せられてるのも自分の外套だった。

「治療、してくれたのか？」

「……………」

返される声はない。シュウはただ黙々と自分の周囲を片付けている。

だが、腕の包帯とさつきの言葉が、如実にそれを肯定していて。

「……また貸し一つ、だな」

溜息つきながら、背中預けてた樹から身体を起こす。その言葉に焚き火に火を戻そうとしていたシュウが不思議そうに見てきた。

その視線には笑みを返す。

「別にいいよ」

無関心にそう言っつて、術で火を起こす。

昨日も思っつたが、えらく野営になれている。

「お前、一人で旅してるのか？」

「そうだけど」

「困らない？」

端的な問い。

でも、それはちゃんと通じた様だった。

「……………」

その証拠に、シュウが黙る。弱音を言うのは嫌だから。

なんだろう。何故だかわかる。

言いたいのは魔族だからとかでなく、子供の姿をしているから。

人間と会えばこんな子供の一人旅が不審がられない筈がない。その度に何かしらの手段で誤魔化してきてるのだろうけど、めんどくさがりやらしいシュウがそれを好ましく思ってるはずもなく。

ちよつと待てよ、お前、何言おうとしてんだよって声が、頭の中のどこかで聞こえた。

「俺も旅に同行しようか？」

——ほらやつぱり呆れた顔されたし。

自分でも呆れてるし。

「……………正気？」

「保護者役がいたら便利だろ？邪魔になったら置いていけばいい」

「俺が何かするとは思わないの？」

「二度も命救われてるお礼。それにお前は俺に危害加えたりしないよ」

確信した口調。

「なんでそういうこと言うの？」

聞き様によつては妙な問い。

言葉が足りないのはお互い様だ。

「面白そうだから。大体お前、なんで神気使えるんだよ？」

人間との混ざりモノで、邪気が薄れたカイリでさえ使えない神気を。

「……………」

「って聞いたって答えやしないだろ？だから、一緒にいればその理由がわかるかと思つたのも理由」

まだ返事がない。だから白状する。

「知りてえんだよ。俺のオヤジが、人間に惚れたわけってのを。俺のオフクロが魔族に惚れたわけってのを。お前が俺に関わって、なんでかわからないけど助けてくれて、俺がお前を同類だと思っわけってのを」

理由はそれだけ。

それは自分が最初に旅に出た時に決めた旅の目的だった。魔族との混ざりモノである自分を産んだ母は村でも厭われていた。だが、村外れで慎ましかに生活し、それでも笑みを絶やさなかった。

母の死後、村を出て旅を始める時に自分に定めた目的。

旅を続けて数年過ぎて、かすりもしなかったその疑問への問いは、この目の前の子供の姿の魔族が持つていると、そう感じた。

「俺をつれてけよ」

その疑問の答えまで。

「……………自分から厄介事に関わるうなんて物好きだな」

呆れ返った声。溜息。人間くさいその仕草。

「でも……………そんな人間を昔、知っていたよ……」

静かな声に驚いて、まじまじと見る。驚愕したのはその言葉の内容でなく、優しいとすら言えるその声。表情は全く変わらない無表情だったけど。

絶句してるカイリを数秒見詰めて、くるとシュウが背をむけた。

「……………好きにすれば」

会話に飽きた様にぽんつと放り出す返答。

その言葉にゆっくりと破顔する。

「おうつ！よろしくな！シュウ」

背中にかけた声に、やっぱり返事はこないけど、そんなの気にはならなくて。

その日から奇妙な二人旅が始まった。

第七話 砂漠の旅路

第七話 砂漠の旅路

「あっちー」

「……………」

心の底からの思いを口にするカイリを無視して、シュウはさくさくと音を立てる砂を踏みしめる。

「だーっ！焼け死ぬー！。焦げるー……………」

「……………」

シュウは先刻からやむことのない彼の不平の声を、聞かないようにすることに集中しているようだ。だがカイリの不平は、それがわかるからこそこのちよつとした嫌がらせ。

「なあ、なあお前暑くねーの？」

延々と繰り返される言葉を全く意識に乗せず、無視しつづけられるだけの忍耐力は不足だったらしく。

「なあ、シュウ。お前さ……………」

「——うるさい」

とうとう返された返答にぶつと吹き出す。流石に我慢できなくなつたらしい。

すると、カイリの吹き出した気配に腹を立てたらしい。歩くスピードが早くなる。

「わー。怒んなくて！悪かったから」

目の前を歩くシュウの身長は彼の太ももくらいまでしかない。コンパスの差から言つてシュウがカイリを引き離すことは無理なのが、背中から感じる怒りの気配に焦って謝る。

旅を共にするようになって三週間。

それでもシュウがカイリに心を許す気配はない。

それでも、一人置いて行こうとすることもなく、邪魔だと言うこともない。

やはり、一見は可愛い幼子の姿で、その実、魔族というとてもないシュウが何を考えているのか、側に居てもわからなかった。シュウにとって本当に歓迎すべき事なのかどうかさえ。

だが、強行に引き離そうとするわけでもないの、一緒にくっついてい、というのが現状だ。

目の前にはフードに隠れた後頭部。

小さくてまるっとしてるそれは無意識に手を引き寄せて。

子供にするようにぽんっと優しく触れてしまってから、はっと凍りついた。

「あ」

「……………」

ぴたりと足を止めたシュウは振り返ることすらせずに動かないから、怒らせてしまったか？と思う。やばいと思う心のままに思わず数歩後ずさり、本気で焦った声を出す。

「わ、わり。つい、な。目の前にあるもんだから無意識に手が伸びて。いや、別に他意があるわけじゃねえから！」

数秒動きを止めていたシュウは、ふうっと溜息をついて、ようやく振り返った。

「暑いのが嫌なら帰ればいい。このファドス砂漠に入る前にも同じコトを言った筈だ」

「お断りだね。この砂漠に入る前にも同じコトを言っただろ」

きっぱりと即答するカイリにシュウが溜息をつく。

困ったような呆れたような苛立っているような複雑な表情。

その表情の意味は、やはりよくわからなかったが、三週間という時間の中でもしかしたらと思うようになった。

——もしかして、どういう表情をしていいのか、わからないだけなんじゃないか？

他人と接することに馴れてなくて、どういう反応を返していいのかわからず、困っているのではないかと。そう、思うようになった。

だとしたら。

「……………結構可愛いじゃねーか」

片手で口を押さえて苦笑を噛み殺す。この眩きと笑いに気付いたら、また気を悪くするのは間違いない。

無言で背を向け歩き出していたシュウが、くるっとふいに振り返る。「何か言った？」

砂嵐や強い日光から身を守るシュウの防塵服もずいぶんくたびれてきたなあと思いつつ、飄々と答える。

「いや、目的地とやらはまだ遠いのかと思ってな？」

その言葉にシュウは正面を向き、遙か遠くを見据えるように目を細めた。

「もうすぐ、だよ」

二人が目指している目的地は、シュウだけが知っている。地図にも載っていないその名前を『太陽の神殿』という。

砂漠の夜は厳しい。

昼間の熱気が嘘の様に、急激に辺りが冷える。

普通、砂漠での旅で必要になる装備は、水と食料、砂嵐や強烈な日差しを遮る頭からすっぽり覆うローブ状の防塵服。そして、夜の為のテントに火を起こす為の着火剤に薪に油、またそれらのモノを運ばせる駱駝などだ。これらの不足は即ち死を意味する。

砂漠に入る前にある街でこれらを整えなければ、砂漠への旅は無謀である筈なのだが、シュウはこれら全てを購入することをしなかった。

その理由はすぐに知れることとなる。

水、食料、薪、油の四つは、以前シュウが邪気の樹の実を収納した異空間の『倉庫』に収納された。着火剤はシュウが指を鳴らして術を使い、火を起こす為、元から必要なかったし、野営時は二人を囲む様に結界を張った。

シュウの張ったその結界は、風や砂を遮断し中央で起こした焚き火のぬくもりを閉じこめ、それでいて、酸欠になる様子もないというすぐれもの。小さな親指大の水晶に封じられている術らしく、カイリですら、それを発動させることができた。

ただ一つの欠点といえば、翌朝目が覚めると結界ごと砂に埋まってしまつて真っ暗になっていたりもするところか。

しかしそれも、術を放つて風を起こしはじき飛ばす為、さしたる苦でもなく。

砂漠で過ごす五日目の夜には。

「あれも慣れると面白いよな」

などと言う余裕すらあった。

「面白がらせる為にしているわけじゃない」

砂漠の強い日差しに曝されてなお白い、華奢な腕を伸ばして防塵服のフードを下ろすシュウ。感情を思わせない口調でぽつりと呟くシュウににやりと笑いかける。

「人生、何事も楽しんどかなきゃ損だぜ」

焚き火で炙っていた干し肉が香ばしい香りを漂わせ、食べごろになつてきたのを見計らつて、一本をシュウに手渡す。それを大人しく受けとつたのを確認して、自分の分の肉も手に取る。

「俺なんかはお前ら魔族と違って、はかない命の人間だからな」

軽く笑つて肉に豪快にかぶりつく。そんなカイリを見て、シュウが動きを止めた。手にした肉に視線を落とすことすらせずに、じつと見詰めるシュウに気付いてカイリが声をかける。

「……………おい、シュウ？」

「……………混ざりモノならなおさら？」

「ッー」

その言葉に緊張が走った。

第八話 欠陥品なイキモノ達

第八話 欠陥品なイキモノ達

『混ざりモノ』

それは、魔族の血が混ざったカイリのことを蔑む時に、魔族が
そしてまた神官などの人間達がはき捨てた言葉。
カイリにとって禁句である言葉。

——怒らせようと挑発しているのか？

視線を鋭くさせ、きつく睨みつけるが、当のシュウは、表情を変えず、手元の肉にかぶりつきはじめた。

一口分噛み切って、もぐもぐと噛み締める姿からそうした悪意は感じられず、溜息をついてぎこちなく力を抜いた。

「……まあ、な」

小さく呟く様に答えて、そこでようやくシュウの口にした言葉の意味を知る。

「——やっぱ、そうなんだな？」

「何が？」

「混ざりモノは寿命が他より短い、んだな」

確認の言葉に食べる手が止まった。

「俺と同行することに……知りたいと言った、母親の言葉の意味を探ることを強行に行おうとするから、知っていると思った……」。予想はしていたが、確信はしていなかった?」

魔族と婚姻を結び、カイリを産み落とし、姿を見せなかった魔族の父を最後まで愛しつづけた、母。

天使と神に仕えるとされる神官達は口を揃えて、魔族は愛を持た

ぬイキモノだと言った。だが、母は魔族を愛し、愛されていると胸を張って答え、笑みを絶やさなかった。死のその時まで。

真実を知りたかった。

カイリは父である魔族に逢った事がない。本当に彼が母を愛していたのか、魔族が愛することが出来るのか知りたかった。それが旅の同行を申し出た理由の一つ。

それを強引に押しきったのは確かに焦りがあつたからかもしれない。

「破魔士の平均寿命は二十歳から四十歳。調べ尽くした資料の中にはどれもそう書いてあつた」

そう言つたカイリをシュウは例の無感情な瞳で見詰めると、淡々と口を開いた。

「天使魔族の寿命は約五百年。人間の八十年の約六倍だ。それだけの時間を生きる二種族だが、これらには一つの共通する特徴がある」
ふいに語り出したシュウを不思議そうにみやる。その真意がわからない。

「彼らは人間のように、個体個体で生殖を行うことができない」

幼い子供の姿で、生殖などという生々しい言葉を吐くシュウに流石に少し引く。だが、シュウはそれにかまう様子もない。

「それは生物として致命的であり、滅び行く運命でしかない。だが、それらの種族は滅びることなく未だ存在する。彼らの子孫は生産続けられているわけだ」

「生産って……………」

まるで物か何かのように。

「天界にも魔界にも、それぞれ一つの施設が存在する。子供を生産し、一定年齢まで養う場所だ。そこにはそれぞれ、神といわれる存在があり、それによって管理され、彼の者の力によって生産される。だから、天使と魔族の数はほぼ一定に保たれている」

「何……………だよ、それ」

シュウの言葉が本当なら、まさに物と変わらない。

無機質な法則。

そこには神殿の神官らが説く神秘さも荘厳さもない。

幼い頃より、すり込まれていた世界観の崩壊に衝撃を覚えるカイリを見て、シュウは緩く首を横に振った。

「本題から逸れた。そんなことはどうでもよくて」

どうでもいいとはとても思えなかったが、シュウの言葉を遮ろうとは思わなかった。ここまで話を聞いても、まだ何を言いたいのかわからない。

「そんな風に生物として基本となるべき能力が欠けた天使と魔族だが、直接の子孫を残す方法がある。……………人間と交わるんだ」
はっと息を飲む。

話がようやく自分の方へ向いてきた。

「そうすると混ざりモノと呼ばれる混血児が産まれる。だが、そうして産まれた混ざりモノの寿命は他より短い。それは生まれを考えれば当然だ」

太陽は東から上る、というように確信に満ちた断言する言葉。

「人間には支えきれない力を与えられるからか？」

それは神官に、又相対した魔族に言われた言葉。だが、シュウはそれを真っ向から否定した。

「違う。生物として決定的な欠陥を補う為に、命を保つ為に必要とするものを消耗してしまうからだ。産まれて来るという行為だけでシュウが語る言葉は理路整然としていて、すんなりと頭に入ってきた。これまでの会話でよく混乱していたのを考えて、わかりやすい言葉を選んでくれたのかもしれないと場違いなことを思った。

忌むべき、下賤のイキモノでないという理論。

——うわ、こいつ。

思考が停止する。

息を飲んで。

——うわ、こいつ、もしかして。

呆然と。

見詰めて。

もしかして、突然こんな話をした理由は。

——慰め、ようと？

寿命をどうにかすることは、たぶんカイリよりも遥かに高度な知識と技術を持つシユウにも、どうにもできないのだろう。

だから。

——凄く………もの凄く遠回りだけど、もしかしたら。
せめて、自分を蔑すむような生き方をしなくて済む様に。

——うわ、こいつ。

こんな、やり方しか、知らない。

胸を、打たれた。

言葉を、失うくらい。

苦しんだ過去を、忘れるくらい。

ただ、胸が、いた、くて。

何も、言えない。

「はは………」

乾いた笑いが零れた。

肉を手にしていないほうの手の平に視線を落として、それで前髪をかき上げるようにして瞼を覆う。

「そっか」

「そうだ」

ぽつりと呟いた声に即答される言葉。それに続いて、食事を再開する物音。

「……………そっか」

「……………」

二度目の呟きには答えが返らない。だが、それは気にならなかった。むしろ、何も言ってほしくなくて、とても有り難かった。

パチンっという薪が弾ける音に、ようやく瞼の掌を外す。そして、俯いたまま、冷えかけた肉を乱暴に噛み切った。

もぐもぐと食いながら言葉をかける。

「とつとと食って寝ないとな。まだ明日も結構歩くんだろ？」

「ああ」

「明日にはつくか？」

「あと二日は考えてもらう」

「もうすぐって言っただじゃねーかよ」

「五日砂漠の旅を続けて残り二日ならもう少しだろ」

「げえ。ちよっと詐欺臭いぞ」

「煩い。文句があるなら……」

「帰らねーからな。俺は」

最初に較べて口数が増えてきたシュウがカイリの言葉に溜息と共に言葉を切る。それを勝ち誇った様に見てから、表情を崩す。笑み崩れるという表現の方が正しいかもしれない。

「……………あーくそ、泣きそうになっちゃったじゃねーかよ」

「勝手に泣いてろ」

「冷てーなあ。旅は道連れ、世は情って言うだろ？」

「知らん」

「またまた……………」

「煩い」

問答無用に会話を断ちきるシュウに堪えきれない笑いが零れて。

砂漠の夜は更けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8285t/>

世界は金の檻

2011年6月24日19時16分発行